

特養の屋上庭園・カフェ、 住民&若者支援団体が活用法を提案!

「イマジン! 千住桜花苑見学会」(令和7年10月31日)



コロナ禍後、再整備した屋上庭園を歩く

エレベーターを降りると、秋の肌寒い屋上庭園が広がる。「地域福祉コーディネーターとして、今日が本当の第一歩…」と思うのは、足立区社会福祉協議会・基幹地域包括支援センター主査の野口弘美さん。特別養護老人ホーム千住桜花苑(足立区千住元町)の最上階を巡る回廊を、見学者たちと談笑しながら歩くも、この後の展開に少し緊張ぎみ。その脇で、先頭に立って案内するのは、千住桜花苑・生活相談員の徳森敬子さん。地域のボランティアと施設をつないでできた人だ。「コロナ禍で菜園は一度閉めました。コロナ後、1年かけてやっと再整備。これからは、みなさんとご一緒に何か活動できれば」と語る。見学者の中から、未手入れに茂る灌木の実を指して、「ミカンかな?」という声。同行の施設職員も「さあ、何でしょ?」と。参加者で園芸を手がける赤松澄枝さんが進み出て、実を手取る。「ゆずです」。橘類の爽やかな匂いが漂う。

足立区にて、4月からスタートした「重層的支援体制整備事業(地域づくり事業)」。

同事業では、子ども、高齢者、障がい者など、福祉の対象者を、縦割りの体制でなく、地域社会の参画で支えていこうとする。住民や団体、施設などの横断的なネットワークづくりが必至。

そこで、令和7年10月31日、足立区社会福祉協議会は、千住桜花苑にて「イマジン！千住桜花苑見学会」を開催し、「地域づくり事業ワークショップ」の第1弾を実施した。参加者は、地域住民、民生・児童委員、若者支援団体、保育園、地域包括支援センター職員など18名。社協職員他、施設職員の協力を得て同会を先導するのは、「地域福祉コーディネーター」の野口さんと同職員の相棒・鈴木正文さんだ。本企画から運営まで手がける。

悩む若者に、「土いじり」の機会を

1階ホールに、イベント名にちなんでジョン・レノン「イマジン」のオルゴール曲がゆったり流れる。千住桜花苑施設長の木村輝明さんが参加者の前で、にこやかに挨拶。「桜花苑のためでなくても結構。この施設の環境を使って、みなさんが『こんなことができる』『やってみよう』ということを提案していただければ」。

特別養護老人ホームとグループホームの見学会の後、ホールに戻って活発な意見交換が行われた。司会の野口さんが、立場の違う参加者同士の意見を引き出し、巧みにつないでいく。

最初に発言したのは、園芸の赤松さんで、「屋上庭園やグループホーム1階の畑へ自由に入れれば、草むしりして何か植えたい」と興味津々。精神的に悩む若者をサポートする一般社団法人「キャリカ」の松岡広樹さんは、「若者たちが、自然に触れることは、心身を癒やし、社会復帰につながる。ぜひ参加させてほしい」と手を上げる。高校・大学生による地域の居場所づくりを支援する一般社団法人「てとらぼっと」代表の和泉薫さんは、「東京農大や千葉大で園芸を学ぶ学生を、ぜひ屋上庭園に。施設利用者の高齢者の方とも交流したい」と提案すると、会場からは拍手。

縫い物クラブの「アクリルたわし」で経費節減?!

地域で活動する「あみ・ぬい倶楽部」メンバー(土井由美子さん、坂田静枝さん、中島ツタ江さん、金田鏡子さん)が、同倶楽部で作成した「アクリルたわし」の提供を申し出た。すかさず、「節約の鬼」と自称する施設職員が、「洗剤を使わなくてすむ。認知症の利用者も安心して使用できるので大歓迎」と笑顔で応じる。さらに同倶楽部が、「地域に向けた編み物教室をこの施設で開きたい」と提案すれば、木村施設長は「ぜひ、どうぞ!」と快諾した。

若者が淹れた本格コーヒーで、カフェの再開を

コロナ禍で閉じてしまったカフェスペースを再開する話題も楽しく展開。以前は、コーヒー1杯100円で販売し、施設利用者の家族や地域にも開放していたという。「てとらぽっと」和泉さんが、「専門にコーヒーの淹れ方を学んだ学生がいますよ」とアピールすれば、「キャリア」堀切里紗さんは、「自立支援の一環として、地域の方にコーヒーをふるまう活動をしています。その若者たちを派遣させてください」と提案。施設職員から、「素敵!」「休憩時間に飲める!」と歓声が上がる。

15歳から25歳までを対象に「心の保健室」を開く「あだち若者サポートテラス SODA（医療法人財団厚生協会）」の小辻有美さんは、上の2団体に「ぜひ支援している若者も、一緒に参加させてほしい」と話す。また、「イラストが得意な方が多いんです」と言えば、施設職員から「感染症予防月間のポスターを描いてほしい」との要望が出る。さらに小辻さんは、「フラワーアレンジメントが趣味の方がいて、展示場所を探しています。ここで飾れませんか?」と問いかければ、即反応が。施設職員が、「以前、生け花をやっていた方が提供された水盤があります。2階エレベーター前のスペースが使えますよ」。

地域の「福祉力」を上げる

足立区民生・児童委員(第一合同会長)の小林尚子さんは、感慨を込めて話す。「ここのデイサービスには、主人の両親が通っていました。屋上で足立の花火を、家族で観たことを思い出します。今日再訪して、改めて職員の方々が元気で明るいなど。また、カフェスペースを使って、子ども食堂などができればいいですね」。

出された提案が、次々と現場のニーズと結びついていくことに、会場は大いに盛り上がる。

最後に、施設側として徳森さんが挨拶。「地域の方々の活動に活用してもらうことは、高齢者施設のことを知っていただく機会になる。そのことで、『地域の福祉力』が上がるのではと。ここの利用者さんは、地元の千住の方が大半。地域のボランティアさんが、例えば屋上で、『あの辺がお化け煙突(かつてあった千住火力発電所の4本煙突)でしたね』など、地元ならではの話をしてくれたら、利用者さんも元気になるでしょう」。

世代や分野を超えて交流できる地域づくりを、皆さんと共に!!

後日、地域福祉コーディネーターの野口さんは語る。「この企画のきっかけは、若者の支援をしている『SODA』の小辻さんと『セーフティネットあだち』の小西有紀子さんより、

『若者の利用者が、足立区内で土いじりができる場所がないか』と相談を受けたことから。いろいろな方に声をかけさせていただき、千住桜花苑の屋上庭園に辿りつくことに。地域とのつながりを大切にされてきた施設長の木村さん、生活相談員の徳森さんの出会いが、とても大きかったです」。

タッグを組んで同企画を進めてきた鈴木さんは「はじめは、成功するか否か、おっかなびっくりでした。しかし、参加されたみなさんが熱心にご提案されたこと、また会後のミーティングでも施設関係者の方々が、提案の実現を積極的に進められようとする姿を見て、ほっとしました。子ども、高齢者、障がい者などの分野を超えたつながりが、まじりあったときの力はすごいですね。今後もこうした取り組みを応援していきたいと思っています」。

今後、千住桜花苑では、間を置かず年末までに、提案者ごとに個別のミーティングを重ね、できることから展開していきたいという。「重層的支援」の最初の花が一輪、まさに咲こうとしている。

(絵と文/ライター・上田隆)